

論文

バーリンとケイの色名進化論の中の中国語色名の
発展についての考察An Investigation of the Development of Mandarin Color Terms in
Berlin and Kay's Theory of the Evolution

呂 清夫 Lü Ching-Fu National Taiwan Normal University

Abstract

According to Berlin and Kay's theory of the evolution of color terms, Mandarin uses only the basic color terms *hei*, *bei*, *hong*, *hwang* and *Lan*. Consequently, the development of Mandarin color terms is slow compared to Japanese, Korean, and Cantonese. This study attempts to examine research and statistics compiled of color terms in classic literature to present the inaccuracies of Berlin and Kay's theory of evolution of color terms as regards Mandarin. Furthermore, the facts demonstrate that as long as 2000 years ago, Mandarin used at least 11 different color terms. In addition, the results of this study also demonstrate that the development of Mandarin color terms is generally no different from the languages of other races.

要旨

バーリンとケイ (B. Berlin & P. Kay) の色名進化論によれば、標準中国語 (Mandarin) には基本色名が白, 黒, 紅, 黄, 緑, 藍の6種類しかないから、日本語, 韓国語 (Korean), 広東語 (Cantonese) などに比して発展が遅れたことが力説されている。本研究は主に色名が存在する歴史的文献によって、バーリンとケイの色名進化論にある標準中国語についての問題点を明らかにする。つまり標準中国語の起源である古代中国語には、西暦紀元前にすでに11種類以上の基本色名が存在していた。そして中国語にある色名の発展が他の民族の色名進化状態ともあまり変わらないことを明らかにした。

1. 色名進化論

バーリンとケイとが共著した「基本色名」(Basic Color Terms)には、各民族の言語にある黒、白、赤、黄、青、茶、グレイ、オレンジ、紫、ピンクの11個の色名に相当するものが基本色名とされている。著者らによると、人類文化の発展は基本色名の使用状態を見れば理解できる。即ちその文化の発展段階は、次の7つの段階に分けられていると言及している。つまり(1)黒、白の色名しか使わない段階、(2)さらに赤の色名を使う段階、(3)さらに黄の色名を使う段階、(4)さらに緑の色名を使う段階、(5)さらに青の色名を使う段階、(6)さらに茶の色名を使う段階、(7)最後にグレイ、オレンジ、紫、ピンクなどの色名が1個あるいは1個以上に使われる段階で、これは最高の段階でもある。ただし、その中の第3と第4段階はたまに民族によって逆に発展する場合もあるという論旨である。¹⁾図1はその7つの段階を示すものである。

JIS Z 8102の有彩色の基本色名は「赤、黄赤、黄、黄緑、緑、青緑、青、青紫、紫、赤紫」であり、無彩色の基本色名は「白、灰、黒」であるが、本論はバーリンとケイの色名進化論と比較するので、彼らが定義した「基本色名」に従う。彼らは特に「基本色名」を定義して、八つの規準を述べている。その中の注意すべき所は次の三つの規準である。

規準(1):それは単純語(monolexic)であり、その意味は色名の局部から予想できない。例えばbluish, lemon-colored, salmon-colored,あるいはblue-greenなどは基本色名にならない。

規準(2):一つの基本色名の明確な意味は他の如何なる色名の中にも含まれない。例えばcrimson, scarletは基本色名にならない、その原因は最も多くの英語使用者にとって、両者の意味は重複し、どちらもredの中に含まれるからである。

規準(6):色名が同時に物体名であり、そしてその物体がこの色名の色彩を持つ時は信用できない。例えばgold, silver, ash(火の灰)は基本色名にならない、そして英語にあるorangeは、場合によっては

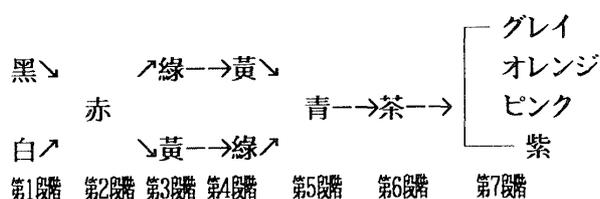


図1 バーリンとケイによる色名進化論の基本色名の現われる順序

基本色名にならない。²⁾

マンセルがorangeを使わなくて、記号としてYRを使うのは、まさにこういう規準に合っていたが、バーリンとケイは実際には、orangeがやはり英語の基本色名から除かれぬことにしている。こういう色名は具象色名や慣用色名ともいえようが、基本色名は抽象色名ともいえよう。

バーリンとケイはかつて各民族の使った基本色名を比較研究して、文化の発展のレベルが高い民族ほど、その使う基本色名が多いのである。アフリカにいる20種類の民族は、黒、白、赤の3種類の色名しか使わないが、彼らには色名を細かく分別する必要がないと思われる。まさにマグナス(H. Magnus)が言ったように「原始の人類は色彩を分別することができるが、緑色と青色とを名付けることができない、こういう色彩が名付けなければならないことはこっけいなことであると思われる。」³⁾

しかしバーリンとケイは色名のための文学的調査が不十分であることも認めた。その著作には、20種類の言語にある色名を実際に調査したものであるが、他の78種類の言語にある色名は他の学者の研究結果から引用したものである。標準中国語にある色名は他の学者の研究結果から引用したものである。標準中国語にある色名の資料もマックルア(E. McClure)とマダラズ(P. Madaraz)の研究によるものである。⁴⁾

2. 古代中国語にある色名の調査

筆者は以前CRAに投稿した論文「Basic Mandarin Color Terms」⁵⁾に、話し言葉にある基本色名の調査結果を発表した。その中に、標準中国語にある基本色名が白、黒、紅、灰、黄、緑、藍の6種類しかないのではなく、確かに褐、灰、橙、桃、紫があって合わせて11種類の基本色名があったことを立証した。そればかりでなく、それらの基本色名の色範囲を十分に調査した。

そしてその色範囲がバーリンとケイの引用した資料よりかなり広いことを知った。(図2, 図3)

本論はさらに、徹底的に書き言葉にある基本色名を十分に調査しようとするものである。古代中国語は今日の標準中国語の起源であるから、本論は古代中国語にある基本色名を調査してみた。調査する時に、まずあらゆる有名な古書にある全ての色名を調べて統計化し、そして各古書の出版された年代やその先後によって、全ての色名の現われた年代やその先後を確かめた。

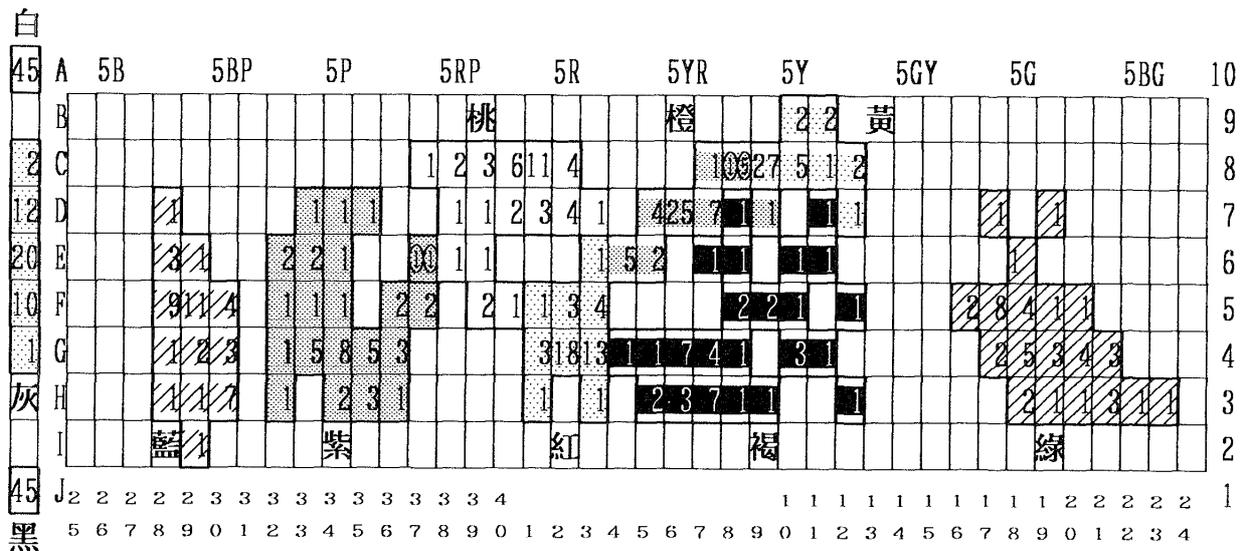


図2 筆者の調査による標準中国語にある基本色名とその中心色（格子の中の数字は幾人がその色をある色名の中心色と選択したかを示す。丸の中の数字は重複選択されていることを示す。例えばE37の色は一人ずつによって紫と桃と認められる。C8の色は橙とも黄とも認められるが、5人がそれを黄と認め、1人がそれを橙と認めている。）

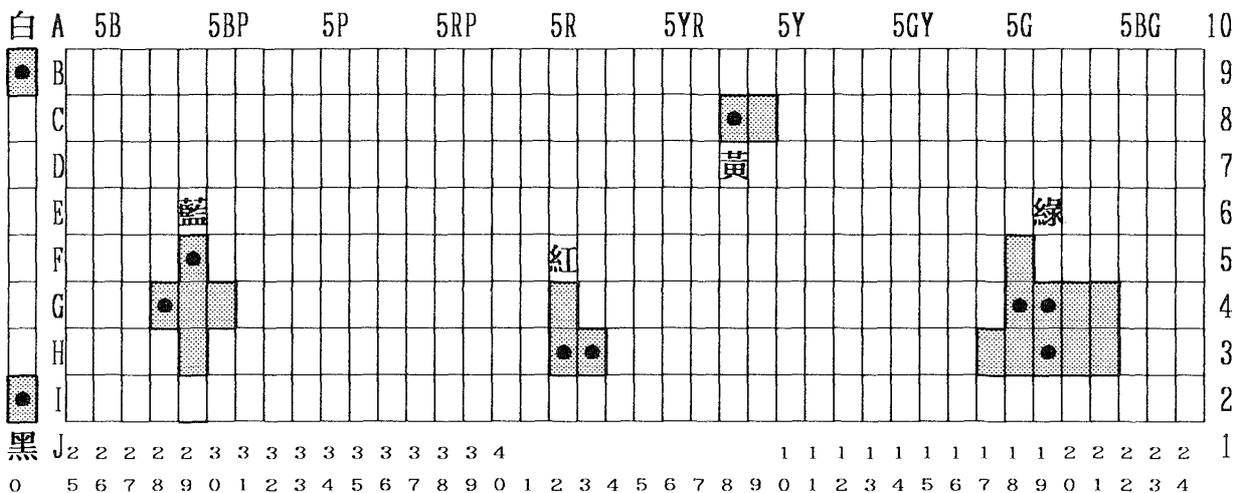


図3 パーリンとケイの標準中国語にある基本色名とその色域（黒点の付いた所が中心色を示す）

それらの色名のある有名な古書には、詩經（約BC1000年～480年）のほか、また論語（約BC450年）、孟子（約BC280年）、周礼（約BC200年）、淮南子（約BC120年）、爾雅（約BC100年）などがある。詩經は中国最古の詩集、長期間に作られた後に、孔子の編といわれる。中には三部門に大別されている。つまり各国の民謡の「風」（例えば「鄭風」）、朝廷の音楽の「雅」（例えば「大雅」）、及び宗廟の祭祀の音楽の「頌」（例えば「周頌」）であり、全部で39,124個の文字がある。論語は、孔子が語った言葉を、弟子たちが編集し、全部で12,700個の文字がある。孟子は中国戦国時代の思想家孟子の言葉をしるした書で、周礼

は周時代の官僚制度を記録したもの、淮南子は漢時代の淮南王劉安が書いたものであり、爾雅は同じ漢時代の古典や事物名を解釈した書である。

調査した結果は、詩經にある色名が最も多くて、そして最も早く現われた。かつてフランス学者のグハネ (Granet) は、詩經だけが古代の話し言葉に近いといっている。⁹⁾この言葉は即古代中国語であり、文言文が記述する対象である。表2は詩經以下の古書にある色名の調査結果である。その中に、まず現われたものは基本色名である。

ここで、もし記述資料の調査をさらに拡大して、各時代の各種類の著作にある色名を統計して見ても、中

表1 西暦紀元前の漢字にある色名の現われる文献一覧表

色名	時期	初めて出現した文献	日本語訳
白	約BC1000年	詩經周頌：「有客有客，亦白其馬。」	「お客様だ，お客様だ，彼は先祖のように白い馬で寄って来る」
黄 朱	約BC820年	詩經邶風：「載玄載黄，我朱孔陽。」	「染めたシルクは玄と黄のものともあり，朱色のものはさらに鮮やかである」
赤	約BC770年	詩經大雅：「獻其貔皮，赤豹黄羆。」	「赤いひょうと恐しい黄色のくまとともに白いきつねの皮を捧げている」
青	約BC750年	詩經鄭風：「青青子衿，悠悠我心。」	「青いえりを思えば，貴方が恋しい」
綠 黑	約BC720年	詩經邶風：「綠衣黃裏。」 詩經邶風：「莫赤匪狐，莫黑匪烏。」	「綠色の上着に黄色の裏地」「きつねより赤いものはなくて，からすより黒いものもない」
緞 紅 紫 紺	約BC450年	論語鄉黨：「君子不以紺緞飾，」 論語鄉黨：「紅紫不以為褻服。」 論語陽貨：「惡紫之奪朱也。」	「君子は紺色や茶色を服の装飾にしない」 「肌着はピンクや紫色にしない」 「紫が朱にとって代わるのはけしからん」
深墨	約BC280年	孟子滕文公上：「斂粥，面深墨。」	「彼はかゆをちびちびすすり，顔色が真っ黒になった」
青白 赤白 火赤	約BC200年	周礼考工記：「凡相膠……，鹿膠青白，馬膠赤白，牛膠火赤，」	「にかわの分類と言え……，鹿によるにかわは青白であり，馬による膠は赤白であり，牛によるにかわは火のような赤である」
青蔥 黧黑	約BC120年	淮南子說山訓：「采薪者……，見青蔥則拔之。」淮南子脩務訓：「堯瘦羸，舜黧黑，禹胼胝。」	「採薪するものは……，ねぎのような緑色の薪を見付かっても，それをとり出す」「堯はやせており，舜の顔色がかびのように黒い，禹の肌が粗い」
縹 緋 纁 陰	約BC100年	爾雅釈器：「一染謂之縹，再染謂之緋，三染謂之纁。」 爾雅釈畜：「陰白雜毛，駟。」	「一回に染めれば，縹（赤黄）といい，二回に染めれば，緋（うす赤）といい，三回に染めれば，纁（黄みの朱）という」「グレイと白の毛の混ざった馬を駟という」

説明：堯，舜，禹の三人が中国商時代（歴史記述時代）以前の皇帝である。

国語にある基本色名はすでにバーリンとケイのいう11種類を備えている。筆者はかつて中国語の青き言葉と話し言葉とにある色名を調査した。古来の哲学，宗教，社会科学，語学，自然科学，応用化学，芸術，文学，地理と歴史など9種類の55冊の名著に使われた基本色名は表2のようであった。

この調査では，全部で2,193個の色名が得られ，平均して一冊の本に40個の色名が使われている。これらの色名は合せて72,912回も使われた。それに最も頻繁に使われた色名は表2のベスト10である。表2にはまた各基本色名それぞれの使われた回数をも示し。第10

表2 九種類の名著にある基本色名のベスト10とその現われる回数一覧表

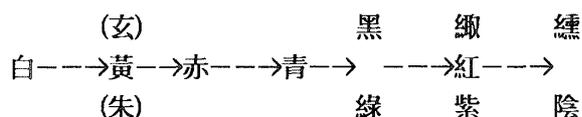
色名	現われる回数	色名	現われる回数	色名	現われる回数	色名	現われる回数
白	8,501	黄	5,195	黒	4,678	紅	3,957
緑	3,219	青	2,630	赤	2,205	褐	2,272
紫	2,201	灰	1,396				

番の灰から見ても，平均一冊の本が25色名の灰を使っている。このベスト10はまさにバーリンとケイのいう11種類の基本色名の大部分を含んでいた。その中に白が圧倒的に多いのはそれが歴史の最も古い色名である（BC1000年）からであろう。

3. 調査の結果と色名進化論の比較

表1から見ると，古代の漢民族がかなり複雑な色名を使ったことが明らかになっている。その中に特に基本色名を取り出して，図4のようにまとめれば，バーリンとケイが言った色名進化論も明白である。実証の資料によって作った図4はバーリンとケイの図3と異なる。その中に古代中国語において，紅はピンクを意味し，緞は雀の頭の色と似ている色であり，「説文解字」の段氏注：「纁を黒の染料に染めれば，緞になる。」緞は即ち茶色であり，陰はうすい黒，即ち灰色であり，纁は黄みの朱，即ちだいたい色である。

基本色名の数だけでなく，中国語色名の進化のプロ



BC1000年 BC820年 BC770年 BC750年 BC720年 BC450年 BC100年

図4 古代中国語の基本色名の現われる順序

セスも、パーリンとケイのそれに近い。特にその初めの白や終りのグレイ、オレンジはある程度似ている。異なるところといえば、黄と青とは早めに現われることであり、そして黄と玄（黒に近い色）と朱（赤に近い色）とは同時に現われることである。それからブラウン系の緞は紅、紫より早く現われたのではなく、それは同時に出現している。

またケイとマクダニエルによると⁷⁾、人類の色名進化のプロセスで、始めは色名の示す色彩が往々にして混沌とした状態であり、例えば二つの色名しか使われない第一段階には、一つの色名が示すのは実は白、赤、黄などのうすい色と暖色系（W/R/Y）を含んでいる。

もう一つの色名が示すのは黒、緑、青など暗い色と寒色系（Gn/Bu/Bk）をも含んでいる。

そして後の進化の段階になって次第に分化して、明確な色を示す意が逐次に出てくる。例えば三つの色名を使う第二段階には、その一番目の色名が示すのは白、赤、黄を含んだ色名から分化して、初めて白が出てくるが、残る赤、黄を含んだもの（R/Y）はそのまま二番目の色名を示す。そして黒、緑、青を含んでいる色名はこの第二段階にはまだ分化していない三番目の色名となり、その分化は第三段階以後まで待たなければならない。

第三段階にはまた二途に分けて、その一途は白の色名と赤、黄を含んだ色名（R/Y）とがそのままであるが、黒、緑、青など暗い色（Gn/Bu/Bk）をも含んでいるものからは、緑、青を含んだもの（Gn/Bu）が初めて分化して三番目の色名となる、残る黒そのものが四番目の色名となる。もう一途は赤、黄を含んだもの（R/Y）が分化して、赤、黄の色名がそれぞれ出て、二番目と三番目の色名となる。そして黒、

緑、青など暗い色（Gn/Bu/Bk）をも含んでいるものがそのまま四番目の色名となる。もちろんその最高の第七段階にある11種類の基本色名は全部明確な色彩を示す、これは色名分化説とも言えよう（図5）。

古代中国語の色名はある程度ケイとマクダニエルのいう状態に似ている。例えば暗い寒色を意味するには玄では足りないであろうから、青が現われ、青ではまだ足りないであろうから、緑や黒が現われている。あるいは明るい暖色を黄味するのに朱だけでは足りないであろうから、赤が現われる。これら玄、朱、白、黄、赤、青、緑、黒の色名は今日でも使われている。但し白と黄色とは第二段階から分化していない（図6）。

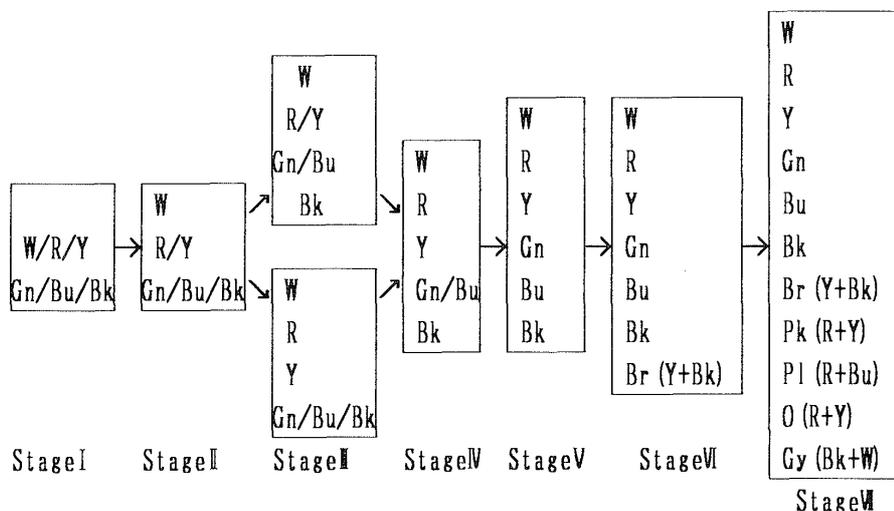


図5 ケイとマクダニエルによる色名分化説

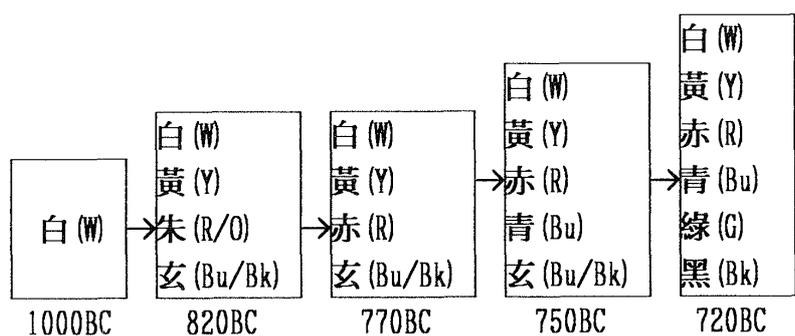


図6 古代中国語にある基本色名の分化（第五段階以後省略）

4. 古代中国語にある色名の特徴

古代中国では基本色名の意識

がかなり強いから、故意に第一次色の白、黒、赤、黄、青を「正色」と言い(表3)、またその第二次色を「間色」と言っている(表4)。西洋の色名はほとんど表音文字を使うが、中国語の色名はまれに表音文字を使う。中国語の基本色名の漢字には、表意文字と形声

表3 中国語にある正色色名の表意字の構成

色名	白	黒	玄	赤	朱	黄	青
代表色	白	黒	青/黒	赤	赤/だい	黄	青
表意字	日/光	燧/火	人/祖/見	火/火	木/赤/木	田	生/井

表4 中国語にある主な間色色名の形声字の構成

色名	紅	緑	紫	緋	縹	紺	褐
代表色	ピンク/赤	緑	紫	茶	そひ	こん	茶
字形	糸偏	糸偏	糸偏	糸偏	糸偏	糸偏	衣偏
発音	工	景	此	取	熏	甘	曷
色名	藍	蒼	橙	桃	碧	陰	
代表色	あい	灰青/緑	だい	ピンク	ひか青	灰	
字形	草偏	草偏	木偏	木偏	石偏	阜偏	
発音	監	倉	登	兆	白	会	

表5 古代中国語と英語色名進化論とにある低彩度の基本色名比較表

古代中国語		パーリンケイ		ケトマクゴニの髣	
色とその織	色とその織	色とその織	色とその織	色とその織	色とその織
殷 赤+黒	紅 赤+白	ピンク	赤+白	ピンク	赤+白
緋 緋+黒	皇 黄+白	フクシ	橙+黒	フクシ	橙+黒
褐 緋+黒	縹 青+白			アケア/	緑+青
縹 黄+黒	陰 黒+白			ターコイズ	
駟黄 黄+黒	碧 青+白			ブルー/	黒+赤
鷲 青+黒				パーガンディー	
紺 青+黒				シャルトルス/	黄+青
蒼 青+灰				タイム	
合計13個		合計2個		合計5個	

表6 古代中国の五行と正色、間色の関係

行(元素)	五行の相互作用	方位	正色	間色
水	火を消す (水が火を克す)	北	黒	紫(黒赤)
火	金を溶す (火が金を克す)	南	赤	紅(赤白)
金	木を毀す (金が木を克す)	西	白	碧(白青)
木	土を蔽う (木が土を克す)	東	青	緑(青黄)
土	水を吸う (土が水を克す)	中央	黄	駟黄(黄黒)

文字とがある、表意文字とは象形文字を含んで、事物の状態を示した文字であり、大部分の正色の色名がそれに属する；形声文字は形と音とを同時に示した文字である。大部分の間色がそれに属する。

表意文字は例えば白は日の上に光っている状態である。黒は火のけむりが薫る色であり、文字そのものは火が炎上って煙突に出てくる象形文字である。赤は大と火との上下に組み合わせる文字であるから、真っ赤な色を意味する。青は福田⁹⁾によると「もとは『生』と『井』(井戸の中に清水のたまったさま)を合わせた文字」である。黄は土地の色であるから、田を組み入れる。玄は初生児が大人に覆われて隠れた状態であり、おく深く遠いさまであり、収縮性、後退性の色でもある。灰の意味は手に取れる火であり、つまり火が灰になる色であることを意味する。

形声文字は例えば間色の色名の緑、紫、紅、緋、縹、紺などであり、それらは全部が糸偏であるから、ほとんど染めることと関係している。形声の「形」はそれらの偏を表わし、形声の「声」はそれらの音を表わす。例えば、紅というとき、その左側の糸は「形」であり、糸偏である；その右側の工は「声」であり、発音である。勿論、以上の正色と間色は、今日に至って、すでに具体的ではなく、抽象的になってきた。

間色の色名を安易にいうと、混色によって出来た色の色名であり、まず赤、黄、青の正色は互いに混色して、緑、縹、紫の主要的な間色となる。白と赤、黄、青とはそれぞれ混合すれば、紅、皇、縹となる。黒と赤、縹、黄、青とそれぞれ混合すれば、殷、緋、縹、紺、鷲となる。グレイもまた青緑と混色して蒼となる。

中国語にある基本色名にある正色と間色はともに方位や五行などを意味する。「周礼」には「東方が青と云い、南方が赤と云い、西方が白と云い、北方が黒と云い、天が玄と云い、地が黄と云う。」と書いている。だから間色を複雑に言うと、五行の色の相互作用の結果である。古代皇帝の服装を記する「玉藻正義」という書には「五方の間色は緑、紅、碧、紫、駟黄である」と書いている、この駟黄はオリーブに当る色名である。また「木青が土青を克して、東方間色が緑であり、緑が青黄である。火赤が金白を克して、南方間色が紅であり、紅が紅白である。金白が木青を克して、西方間色が碧であり、碧が白青である。水黒が火赤を克して、北方間色が紫であり、紫が黒赤である。土黄が水黒を克して、中央間色が駟黄であり、駟黄が黄黒である。」と言っている。

碧について段氏注は「金白が木青を克する色であるから、(碧の中に) 白という文字が入っている。」と書いている。また仏教から言うと、五つの方位の間色は紫、紅、緋、緑の、騮黄である。

5. 色名進化論の問題点

さらに西洋の心理学でいうと、かつてケイとマクダニエル (P. Kay, C. K. McDaniel) は基本色名の性質についてこう言っている⁹⁾ : 「それはつねに基本反応カテゴリーの交わり (the intersections of fundamental response categories) を名づけるのである。」また「将来英語にある幾つかの基本色名でない色名は、つねに基本反応カテゴリーの交わりを名づけることが可能である。それらの色名が基本色名になるであろう。即ちアクア/ターコイス (緑+青)、マルーン/バーガンディー (黒+赤)、シャルトルーズ/ライム (黄+青) がそれに属する。」といった。それらの色名はほとんど原色を指示するものではないが、将来はやはり基本色名になるであろう、ちょうどブラウンやピンクのような色名と似ている。

古代中国にある低彩度の基本色名はバーリンとケイの色名より多く出てくる。低彩度の基本色名の中に、殷 (赤+黒)、蒼 (灰+青緑)、紺 (青+黒) などは今日の台湾でも使っているが、紺などという色名は今日の日本語でも使っているが、バーリンとケイはそれらに当る基本色名を載せていない。実際にバーリンとケイの基本色名の数の決定が、もした各民族の基本色名の数からの総合的な推測であるなら、中国語や日本語という歴史の長い言語に含まれている基本色名の種類を見のがすことはできない。

内川の調査によると¹⁰⁾、「10人の被験者すべてに用いられた色名は基本色名とmizuの12色名だけであり、この12色が基本色名の特徴(1)を完全に満足していることとなる。」この中のmizuは水色であり、ケイとマクダニエルのいうアクアでもあろう、これは英語のように将来「基本色名になるであろう」ではなくて、すでに基本色名になっているであろうが、バーリンとケイは注意しなかった。

こういう中国語と日本語にある低彩度の色名から見ると、全世界の各民族の基本色名は果して11種類であろうか？ バーリンとケイは、日本語の色名には白、黒、赤、緑、黄、青、茶、紫、茶、桃、灰あるいは鼠 (haiiro or nezumi) があるから、レベルの高いものだと言っている。実際に内川の調査には、「10

人の被験者すべてに用いられた色名」は赤、緑、黄、青、茶、紫、ピンク、白、水の9個しかないが、「だいたいとオレンジ、桃とピンク、灰とグレイをそれぞれ同一のカテゴリーに属するもの」とすると、10人の被験者すべてに用いられなくても、例えば灰とグレイが用いられた人数を合わせて計算すると、やはり11種類の基本色名が出てくる」と著者は言う。

スタンロー博士 (Dr. James Stanlaw) の調査によると、オレンジ、ピンク、グレイがだいたい、桃、灰とそれぞれ異なっている。つまり、外来語の色名が意味する色の明度が伝統色名のそれより高くなる¹¹⁾。まして茶、桃、灰、鼠は全部慣用色名であるから、規準(6)に合わないことになるだろう。実際に中国語の色名の後進性が決められた原因の一つは、その基本色名には、白、黒、紅、黄、緑、藍しかない、その色名の中のは、グレイなどに相当するものがないと見られるからである。中国語には灰色があっても、それは前述のashに相当するものに過ぎないと見抜かれたから、規準(6)に合わないと考えられた。

ここまで論じるのは、バーリンとケイの中国語の基本色名についての見方に対する訂正だけでなく、彼らの基本色名そのものの定義に対する疑問視も含んでいる。

かつてスタンロー博士は個人的なコミュニケーションの中でバーリンとケイの色名進化論についてその意見を示した。即ちその色名進化論は特にアジアに関する部分についていろいろな面で確かに欠点が存在していることを完全に指摘してくれた。そしてこのことは彼が数年の間にずっと主張した意見であったが、ただ彼の着眼点は標準中国語からではなく、日本語からである。そうすると、これはもう一つの根拠で、色名進化論が適切でない部分を証言してくれている。

6. 中国語にある色名の発展

古代中国には約BC1000年から基本色名が使われ始めたが、5つの正色は全部BC1000年からBC720年までの間に出現した色名である。そして正色が全部出たBC720年に間色が出始めた。「孟子」が現われるBC280年からは色名の前に修飾語を付すことが使い始められた。そして「周礼」が現われるやBC200年以後は、基本色名自身の組み合わせる慣用色名が初めて使われた。さらに「淮南子」が現われるBC120年以後は、慣用色名が大量に見られるとともに、中国語の色名発展の初めてのピークにも達した。また西暦紀

元以後は、慣用色名がさらに大量に現われた。この時期では抽象的な基本色名も増えているが、増える量が慣用色名に及ばなかった。

実際に古代中国語はBC300年ごろ、すでに完璧な言語哲学が出てきた。当時の有名な学者荀子はその「正名」という論文の中でこう言っている「事物を概括して名付ける時に、そのとった概念が同じなら同名を付けているが、そのとった概念が異なるならば異名を付けている……。万物が多くても、概括的に呼ぶなら、例えば『物』と呼んでいる。こんな時、出来るだけすべての事物を概括しなければならない。また万物を一々呼びたいならば、『鳥獸』などで呼んでいる。鳥獸などというのは分類の呼び方であり、こんな時、出来るだけすべての事物を細分しなければならない。そして分類できない所まで細分しなければならない。」ここで色名から見ると、基本色名は概括的な名詞であり、慣用色名は細分的な名詞である。

そこでもし古代中国語の発展プロセスを整理すれば次のようになる。

(1)正色の色名の出現：例えば「詩經」にある赤、黄、青、黒、白である。

(2)間色の色名の出現：例えば「論語」などにある紫、緑、纁、紅、緹、陰などである。

(3)修飾語の付いた色名の出現：例えば「孟子」にある深墨などである。

(4)基本色名の組み合わせの出現：例えば「周礼」にある青白、赤白、赤黒、青黒などである。

(5)事物名の付いた色名の出現：例えば「周礼」にある火赤、「淮南子」にある黧黒（かびの黒）、青葱（ねぎの緑）などである。

この発展のプロセスは大体コーナーラップとワンスチャー (A. Kornerup, J. H. Wanscher) らがいう英語の色名発展に近い¹²⁾。彼らの発展のプロセスにある色名の現われ方は、(1)主要基本色名 (primary basic names)：赤、黄、緑、青、黒、白など、(2)グレイ、ブラウン、オレンジ、マジエンタ、紫など、(3)基本色名の組み合わせ：黄緑、青黒など、(4)修飾語の付いた色名：うすい青、ふかい黒、緑みの青など、(5)事物名の付いた色名：レモン・イエロー、ベルリン・ブルー、スプリング・グリーンなど。そして中国語の正色、間色の数は英語の基本色名とは少し出入りがあり、また両者の(3)(4)の順序も互に逆になるが、全体から見ると、あまり変わらない。バーリンとケイのいわゆる標準中国語の後進性は見られない。

しかし中国語の基本色名の中には、時代によって、変化した場合もあった。例えば緋、殷、蒼、紺は今日まで標準中国語に使われるが、纁、皇、緹、縹、鷲は標準中国語にはあまり使われない。その情況は現代イタリア語の色名が古代ラテン語より少ない場合と同じである¹³⁾。後世になると、縹は橙に、赤は紅に、緹は褐や茶に、青は藍に、陰も灰に代えられた。勿論、前述のように他に慣用色名が大量に現われた。

いずれにしても、標準中国語と古代中国語はともにバーリンとケイの11種類の基本色名を備える。それらの色名が意味する色相と明度がバーリンとケイより広いだけでなく、その意味する彩度ももっと広い。¹⁴⁾つまり色空間はバーリンとケイのそれより広い。

そして古代中国語の色名には、よく繊細な表現をしている。前述の周礼考工記にある「一回染めれば、縹といい、二回染めれば、纁といい、三回染めれば、纁といい」と言う記録は、実際にまた引き続き「四回染めれば、朱といい、五回染めれば、緹といい、六回染めれば、玄といい、七回染めれば、緇（真っ黒）という。」と書いている。

即ち、四回目までは赤系の鉱物性染料で繰返して染めていくと、彩度がだんだん高くなり、色相と明度も変っていく。縹、纁、朱は異なる暖色系の色彩を表示する色名である。そして五回目以後は、また黒系の鉱物性染料でそれを繰返して染めていくと、明度がだんだん低くなる、色相と彩度も変っていく。緹、玄、緇も異なる低彩度の色彩を表示する色名である。

そこで、色名の使用がかなり複雑であることが見られるから、古代中国語の基本色名は11種類しかない訳ではない。実際に、古代中国には、すでに少なくとも白、黒、黄、朱、玄、赤、青、緑、紫、緹、紅、纁、縹、緹、碧、紺、陰、殷、鷲……など20種類ぐらいが存在していた。その中にバーリンとケイの11基本色名と対応する古代中国語の色名は白、黒、黄、赤、青、緑、紫、緹 (Brown)、紅 (Pink)、縹 (Orange)、陰 (Grey) である。

7. 謝辞

終りに、この論文を纏めるに際して、千葉大学工学部矢口博久教授、東京工芸大学芸術学部久保走一教授、並びに女子美術大学大学院川上元郎教授および福田邦夫教授の御指導を賜わった。上記の諸氏に深く感謝の意を表する。

参考文献

- 1) B. Berlin, P. Kay: *Basic Color Terms*, University of California Press (1969) 17-23.
- 2) Ibid. 5-7.
- 3) Ibid. 141.
- 4) Ibid. 114~133. その本のなかに、アンケートした人数がほとんど書かれてなく、その中国語、日本語、韓国語の色名の調査は、主に他の学者の資料を、日本語の色名はMcLureの資料を、韓国語の色名はMandarazの資料を、中国語の色名はMcLureとMadarazの資料を引用した。そしてそれらの学者の調査した人数については、日本語の色名の調査では明記しなかったが、中国語の色名の調査した人数は、McLureの資料には1人、Madaraszの資料には数人 (several) であり、韓国語の調査した人数は5人である。
- 5) Lü Ching-Fu: *Basic Mandarin Color Terms*, *Color Res. Appl.* 22-1 (1997) 4-10.
- 6) 高名凱: 「中国語語法論」, 台北開明書店, (1985) 13.
- 7) P. Kay, C. K. McDaniel: The Linguistic Significance of Meanings of Basic Color Terms. *Language* 54-3 (1978) 639.
- 8) 福田邦夫: 「赤橙黄緑青藍紫」, 青娥書房 (1986) 163.
- 9) P. Kay, C. K. McDaniel: Ibid. 641.
- 10) 内川恵二: 「表面色のカテゴリカル知覚」, 光学17-12 (1988) 47, 48.
- 11) Dr. James Stanlaw, *Color, Culture, and Contact: English Loanword and Problems of Color Nomenclature in Modern Japanese*, Urban: University of Illinois (1987) 176.
- 12) A. Kornerup, J. H. Wanscher: *Color Atlas*, New York: Reinhold Publishing Co. (1982) 138, 139.
- 13) Andrea M. Kristol: Color System in Southern Italy—A Case of Regression, *Language* 56 (1980).
- 14) Lü Chig-Fu: *ibid.*, fig. 11.

(受付日: 1996年12月2日)

筆者紹介



呂 清夫

1942年9月20日生

筑波大学芸術研究科, 構成専攻

1980年修士課程修了

国立台湾師範大学工芸教育学系及

び大学院教授

日本色彩学会会員

芸術学修士

1985年9月から一年間, 筑波大学客員研究員